

看護学生の実習における学びと指導の指針

——統合看護実習から——

Learning and teaching of guidance in training of nursing students

下川原 久 子

要約 学生が実習目標達成に向けた学びを分析した結果、「時間管理の方法」、「安全管理の方法」、「チームの一員としての責任ある行動」、「看護管理の視点」を学んだ。フリー計画では主体的な行動にはやや欠けることもあったが、実習中に視野が広がり看護へのモチベーションが高まった。医療の役割や看護の在り方を学び、知識が深まった。総合的な振り返りでは、「看護の質の向上へ向けた看護管理」、「チームの一員として責任ある行動の必要性」、「学習への振り返りと課題」を明確にできた。

はじめに

看護学実習はあらゆる看護の場において、クライアントを対象に実践し、既修の理論、知識、技術を統合、深化、検証するとともに、看護の社会的価値を顕彰する授業である。そして、看護基礎教育課程における看護学実習は、① 人間を対象に展開される授業、② 複雑な人間関係と多様な場所と時間において展開される授業、③ 看護を提供する職種の専門性が問われる授業、④ 多様な教育背景をもつ指導者の存在する授業、これら4項目の特質をもつ。看護学実習においてその教授活動は、実習目標の達成を目指す学生の学習活動を支援するものである(杉村, 舟島, 2012)。

本学における統合看護実習では、臨地実習の総まとめとして複数患者の看護の実践と看護管理の成果を考えていく。また、自己の振り返りから今後の課題を明らかにしていくことを目的としている。統合看護実習の位置づけは、総まとめとしてということからその役割は大きい。したがって学生は、主体的な行動によって実習を展開することを期待される。しかし、専門実習と連続した実習体系での実習となるために、統合看護実習への準備ができないという学生の声も多く聞かれる。そのことが、統合看護実習での事前学習へと結びついていないことや統合看護実習で求められる知識の不足からも伺える。これまでの

実習の反省として、主体的な行動の不足、知識の不足は上位に上がりその改善を求められるところであった。そこで、今年度はまず“主体的に”をどう伸ばすか、“知識の不足”をいかに補っていくかを考えてきた。今年度は、学生が自ら計画できる「フリー計画」によって主体的な行動ができるような構成とした。また、看護師のシャドー観察によって広い知識が必要であることを意識付け、これらを実

習目標の要素に加えた。臨地看護実習は看護基礎教育の授業形態の位置づけである。実習の展開は実習目的・実習目標を基準としており、その達成度から評価される（杉村，舟島，2012）。本稿では、実習目標の達成状況を学生の実習記録物の「まとめ」から、学びを考察した。本稿によって、専門看護実習の総まとめとして学生の学びと課題および、今後の実習指導における方向性を報告する。

I. 研究目的

統合看護実習において、学生の「学びから実習目標の達成状況を把握し、実習の総まと

めとして実習指導の方向性を検証する。

II. 統合看護実習の内容と評価方法の概要

本稿における平成26年度の実習要項の概略は以下の通りである。今年度より、学生の主体的な計画である「フリー計画」を取り入れ、さらに看護師の一日の看護をシャドー観察することにより時間管理、優先順位、安全管理の理解ができるように構成した。

1. 実習目的

臨地実習の総まとめとして、健康上の問題をもつ複数患者の看護の実践を通してチーム医療の展開を理解する。また、看護管理者の役割を理解し、看護の成果を考える。さらに、統合看護実習を通して、看護師として期待されることを知識・技術・態度を振り返り、今後の課題を明らかにする。

2. 実習目標

- 1) 健康障害をもつ複数の患者に対し、安全・安楽を重視した実践を通して看護管理の理解ができる。
- 2) 看護実践を通して、看護チームの一員として看護の役割と責任を理解し、自覚ある行動をとることができる。
- 3) 看護管理者実習において看護管理のしくみや機能の実際を知ることができる。
- 4) 看護チームおよび他職種医療チームの連携、協働の実際を体験し、その役割を理解することができる。
- 5) 看護実践を通して、自己の到達度について総合的な評価ができる。

3. 実習内容

対象施設とグループ編成 7施設病院 18
病棟 1人～6人グループ

- 1) 実習方法 事前学習、フリー計画立案、
学び合同発表会
- 2) 実習期間 9月～11月までの2週間
- 3) 実習内容
 - ・1週間：複数患者看護（シャドー観察と
援助の介入）…学生1人は1人の看護師
の受持ち患者全員のシャドー観察と一部
援助の介入を行う。情報収集は、現病歴・
既往歴・治療・看護を主とし事前に情報
収集を行い、情報の不足は同日に補う。
当日の看護師の受持ち患者は平均4～6
人である。情報収集は、前日あるいは当
日である。複数患者の人数や当日配置の
看護師については、施設病院の日常性に
合わせ実施する。
 - ・1週間：看護管理見学実習（師長・主任
に同行）
 - ・フリー計画見学実習2日間（施設内指定

部署の選択後計画立案)

- 4) 記録物内容：複数患者実習…一日の行動
計画・振り返り、看護管理（1日行動計画・
振り返り、看護管理見学内容と学び）、フリー
計画（1日行動計画・振り返り）、オリエンテー
ション、カンファレンス、統合看護実習のま
とめ、統合看護実習の自己評価。
- 5) 実習評価：実習担当教員と科目担当教員
による総合的な評価を行う。
- 6) 科目担当教員と実習指導教員相互の共通
理解：著者は事前にシャドー観察のシミュ
レーションを実習先病棟で1日実施した。そ
の目的は、実習要項に従い学生が情報収集を
どの程度できるかという検討のためである。
実習記録物に時間が取られることへの実践の
影響を考えたためである。その結果を指導教
員に説明し、情報収集において「現病歴・既
往歴・治療・看護」を主とし実施することと
した。また、実習形態が「シャドー観察」と
「フリー計画」という形態に変更しており、
実習目標の達成状況を共通理解した。

III. 研究 方 法

1. 研究期間 平成26年9月～11月

項目を整理し、カテゴリー化した。

2. 研究対象 某短期大学3年次「統合看護
実習」の実習終了後に提出された看護実習記
録物（30名）

4. 倫理的配慮

- 1) 研究対象者の人権に関する配慮
 - ・記録物は教育的研究に使用されることを
実習前に説明する。
 - ・個人は特定されずプライバシーは保護さ
れることを口頭で説明する。また、実習施設
の関係者に特定の学生を示すものではないこ
とを説明する。

3. 分析方法

・全記録物から「統合実習のまとめ」はラ
ンダムに30名を選択する。文章を一文に区
切り、93項目を抽出した。KJ法にて同類の

2) 研究対象者の理解、同意を得る方法

- ・実習前に記録物に関しては、教育的研究に使用し実習内容に反映されるものであることを説明する。
- ・本研究は学内倫理審査 No. 14-12 にて承

認された。また、承認事項に則り許可された。

3) 研究に使用した記録物は厳重に保管し、本短期大学看護学科の実習記録物扱い規定に従い処分する。

IV. 結 果

統合看護実習において、実習目標からの学びを以下に示した。実習目標は5つの視点がある。以下は実習目標に対しての学びの結果である。

実習目標1(表1)は、「健康障害をもつ複数の患者に対し、安全・安楽を重視した実践を通して看護管理の理解ができる」であり、複数患者受持ち実習と看護管理の理解に焦点を当てている。学びは53項目を抽出でき、カテゴリーは“時間管理の方法”と“安全管理の方法”に区別することができた。1つ目の“時間管理の方法”では3つの視点<優先順位に影響を与える要因と優先順位の変更><動線と時間管理><時間管理とチーム体制>、次に“安全管理の方法”では4つの視点<スタッフや患者、他職種との情報交換><色々な場面における安全確認の意識づけ><病態・観察要点の知識による予測><患者の自己管理指導による患者自身の安全管理>であった。

実習目標2(表1)は、「看護実践を通して、看護チームの一員として看護の役割と責任を理解し、自覚ある行動をとることができる」であり、看護チームの一員としての行動に焦点を当てている。学びは25項目を抽出でき、カテゴリーは3つの視点で<看護チーム・他

職種との情報交換と協働><記録物への記載やチェック体制への責任><患者に寄り添うこと>であった。

実習目標3(表1)は、「看護管理者実習において看護管理のしくみや機能の実際を知ることができる」であり、看護管理者実習の業務に焦点を当てている。学びは10項目を抽出でき、カテゴリーは2つの視点<「人」「物」「時間」「金」「安全性」「効率性」の管理><広い視野と看護観>であった。

実習目標4(表2)は、「看護チームおよび他職種医療チームの連携、協働の実際を体験し、その役割を理解することができる」であり、フリー計画に焦点を当てている。学びの内容は実習施設ごとに実習が異なるが11の内容で、学びは93項目抽出できカテゴリーをまとめることができた。フリー計画別に、①リーダー業務でのカテゴリーは、3つの視点<業務量と内容のバランス調整><医師の指示受けと診療の補助><患者の異常の早期発見>であった。②患者のケアでのカテゴリーは3つの視点で、<優先順位、安全管理、異常の早期発見を踏まえた看護><知識・技術、予測される変化の把握><他職種や看護チームの協働>であった。③医療安全でのカテゴリーは2つの視点で、<医療事故マ

表 1. 実習目標 1：複数患者受持ち実習、実習目標 2：看護チームの一員、実習目標 3：看護管理者実習

	カテゴリー（件数）	サブカテゴリー
複数患者受持ち実習と看護管理の理解 実習目標 1	<時間管理の方法> 1) 優先順位に影響を与える要因と優先順位の変更 (10)	<ul style="list-style-type: none"> ・当日の状態や検査・治療・処置リハビリテーションなど他職種との関連、時間指示、家族への配慮が優先順位に影響する。 ・患者の精神的な側面への配慮には、時間をかけることがある。 ・優先順位により時間管理が行われていた。
	2) 動線と時間管理 (9)	<ul style="list-style-type: none"> ・VS測定時に点滴・処置など、動線を考慮した行動を行う。 ・ケアの準備を確実に行うことが時間効率につながる。 ・時間管理の段取りや日程に合わせたケア計画が必要である。
	3) 時間管理とチーム体制 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・チームで協力し時間管理を行うこともある。
	<安全管理の方法> 1) スタッフや患者、他職種との情報交換 (15)	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の申し送りの情報交換と安全確認を行う。 ・自分の現状を理解できない患者へのスタッフ間の統一した安全対策を工夫する。 ・チームカンファレンスにより情報共有し安全・安楽な意識付けを行う。 ・患者とのコミュニケーションにより体調変化に気付く。 ・インシデント、アクシデントの情報公開と安全への意識付けを行う。 ・スタッフ・他職種間との連携・協働による情報交換と安全管理を行う。 ・時間管理と安全管理は、同時に管理される。
	2) 色々な場面における安全確認の意識づけ (21)	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の申し送りの安全確認が大切である。 ・患者・スタッフ間の情報を基盤とした直接的観察を行う。 ・環境整備による安全対策を行い、転倒・転落を防止する。 ・他職種との協働による安全対策を行う。 ・医療廃棄物を区別し、感染予防対策に準じる。 ・電子カルテの個人情報保護やセキュリティ管理を行う。 ・患者の誤認予防の統一した工夫を行う。
	3) 病態・観察要点の知識による予測 (12)	<ul style="list-style-type: none"> ・疾患の経過と観察ポイントを押さえたケアを行う。 ・安全管理の知識とアセスメント力が必要である。
	4) 患者の自己管理指導による患者自身の安全管理 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・化学療法を行う患者には、できるだけ患者自身が症状を自己管理できる指導を行う。
看護チームの一員としての行動 実習目標 2	1) 看護チーム・他職種との情報交換と協働 (18)	<ul style="list-style-type: none"> ・夜間の情報が日動につながっている。 ・カルテやパスを確認することは重要である。 ・情報交換や相談は自己防止につながる。 ・VS測定、ホウレンソウなど患者に関わるすべてのことに責任を伴うことである。 ・処置や援助に漏れがないようなチェック体制が必要である。 ・他職種とのカンファレンスなど連携が管理につながっている。 ・自分の時間管理も、チーム全体を考慮して時間管理をしていく必要がある。 ・検査・処置をスムーズに行うにはチームの協力が必要である。 ・チームで働いているという意識が、人として成長させる。
	2) 記録物への記載やチェック体制への責任 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が計画するときには、現病歴・既往歴、経過記録なども必要である。 ・記録を書く、援助の根拠を知ることが患者に不利益がないことである。 ・処置や援助に漏れがないようなチェック体制が必要である。 ・アセスメント力の向上、機器の取り扱い、技術力の向上、が必要である。
	3) 患者に寄り添うこと (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の声に耳を傾けたり、患者に負担を書けない配慮があり、常により看護を目指している。
看護管理者実習 実習目標 3	1) 「人」「物」「時間」「金」「安全性」「効率性」の管理 (7)	<ul style="list-style-type: none"> ・スケジュール管理を行う。 ・病棟目標の達成に向けている。 ・スタッフへの精神的な支援を行う。 ・他職種や家族と連携し、スムーズな援助の調整を行う。 ・新人教育、スタッフ教育、会議、委員会への参加し、職場環境や療養環境について考えていく。 ・災害時に備えた人数の確認や重症度の確認を行う。
	2) 広い視野と看護観 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・管理者が広い視野があり、看護観や仕事に関する考え方はスタッフや他職種、家族に影響する。

表2. 実習目標4：フリー計画学び

	カテゴリー	サブカテゴリー
リ ー ダ ー (8)	1) 業務量と内容のバランス調整	・チームでの業務量・内容のバランス調整を行い、チームの業務負担を軽減する。 ・病棟管理者不在時のベッドコントロールを行う。
	2) 医師の指示受けと診療の補助	・医師の指示受けとチームへの情報提供を行う。
	3) 患者の異常の早期発見	・患者の観察によって異常の早期発見を行う。
患 者 の ケ ア (20)	1) 優先順位、安全管理、異常の早期発見を踏まえた看護	・薬剤投与時間を守る。 ・薬物療法の副作用について報告・連絡・相談によって、安全・安楽なケアを行う。 ・データや患者の訴えを踏まえた援助を行う。 ・人工呼吸器装着中は2人で行うことにより安全管理に努める。 ・手術・検査前は入室に合わせて優先順位を考え行動する。 ・心理面を配慮した援助が必要である。
	2) 知識・技術、予測される変化の把握	・知識・技術の習得、予測される変化の把握が重要である。 ・観察能力とアセスメント能力が大事である。 ・短時間で全身状態や心理面までの情報収集を行う。
	3) 他職種や看護チームの協働	・検査・治療において他職種が関わる。 ・患者の安全・安楽には、看護チームの協力がある。
医 療 安 全 (8)	1) 医療事故マニュアルの活用と安全確認	・医療事故マニュアルの整備と活用状況の確認と周知、院内ラウンドを実施する。 ・一人一人が安全な医療を意識できるよう周知の促し、確認している。 ・院内で組織的に安全対策に取り組んでいる。 ・医療安全レポートの分析と結果のフィードバックによって医療安全への意識付けを行う。
	2) 医療事故後のフォロー	・医療事故後の精神的ケア、家族への対応を実施する。
透 析 看 護 (8)	1) 患者の自己管理指導	・患者の食事制限など自己管理指導が課題となることもある。
	2) 血液感染予防、環境の整備	・透析室の環境設定を整える。 ・血液感染予防が重要である。
	3) 機器の取り扱いやシャント穿刺の技術	・シャント穿刺の際の技術面が信頼関係につながる。 ・機器の取り扱い、目標体重の管理が重要である。
ケ ア 和 (4)	1) 看護チーム、他職種との連携	・緩和ケア認定師は、水準の高い看護を実践している。 ・看護チームと他職種との連携・協働により患者の生活の質を高めている。 ・緩和ケアは、患者や家族の苦痛や不安に対して心・身・社会的にサポートを行っている。 ・看護チームにも指導・相談を行う。
テ リ リ シ ハ ビ リ (7)	1) 退院後の継続と心理面のサポート	・病棟や自宅でもできるよう看護師と協働し進める。 ・ADL拡大や維持に向けて行われる。 ・嚥下機能の維持・向上に向けたリハビリテーションも行われる。 ・自宅での生活に向けてADL、IADLも行われる。 ・意欲的に行うことができるように、できることをほめる。 ・患者と一緒に行うことで、リハビリの効果を実感した。
	2) 合同カンファレンスによる情報交換	・合同カンファレンスによって患者のリハビリの目標を情報交換し、次につなげる。
検 査 内 査 視 鏡 (6)	1) 患者の不安を軽減とスムーズな検査の進行	・検査を受ける患者の不安を軽減している。 ・検査がスムーズにできるように物品を準備する。 ・検査を受ける人の人数や内容によって、確認作業を行う。
	2) 検査中の患者の観察	・検査中は薬剤の副作用などの観察が重要である。
皮 膚 ケ ア ・ (10)排 泄	1) 認定看護師と褥瘡対策チームの活動	・褥瘡対策チームは他職種との連携で活動している。 ・認定看護師は院外においても病院や訪問看護師と連携をとりケアに関わっている。
	2) 認定看護師の専門的な知識と指導	・家族の行っていることを否定せずに助言する。 ・認定看護師は専門的な知識をもっており広い視野をもったケアやスタッフへの指導も行う。 ・患者に適したケアを提供していく。
が ん 化 学 療 法 看 護 (7)	1) 副作用の自己管理指導と患者・家族のサポート	・外来では、病名告知が前提である。 ・自宅では、抗がん剤による副作用は自己管理をしていくが必要である。 ・外来患者の場合は維持できるようサポートが重要である。 ・心身の苦痛に関して患者・家族へのサポートが必要である。
	2) 薬剤の被曝予防への対処	・薬剤の管理はダブルチェックが重要である。 ・抗がん剤のミキシングは、被曝予防対策が行われる。
	3) 他職種との連携と院内研修	・緩和ケアの実践・指導・相談ができるよう院内で化学療法に関する研修を行っている。 ・他職種との連携の中で緩和ケアが行われている。
連 携 医 療 (5)	1) 医療費・医療相談、退院後の支援	・地域連携、退院調節・支援が行われている。 ・院外・施設などとの連携にてスムーズな診療が行われている。 ・患者・家族の医療費・医療相談を行っている。 ・地域医療連携は地域の人が安心して医療を受けられるための役割がある。
	2) 来院者の感染予防対策	・院内で手洗いの励行を行う。 ・院内の清潔、清掃、整頓の奨励と点検、評価を行う。 ・感染拡大の予防と他職種との連携による予防対策を行う。
感 染 管 理 (10)	1) 院内の取り組み	・家族、業者へのマスクの励行、さらに業者への研修やワクチン接種の実施など面会の制限を行う。 ・感染拡大の予防と他職種との連携による予防対策を行う。
	2) 来院者の感染予防対策	・家族、業者へのマスクの励行、さらに業者への研修やワクチン接種の実施など面会の制限を行う。 ・感染拡大の予防と他職種との連携による予防対策を行う。

表 3. 実習目標 5：総合的な評価と学び

	カテゴリー	サブカテゴリー
自己の到達度について総合的な評価 実習目標 5	1) チームの一員として、責任ある行動の必要性 (24)	<ul style="list-style-type: none"> ・優先順位を臨機応変に調整していくことが必要である。 ・チームの一員として責任ある行動、積極的に学ぶ姿勢が必要である。 ・報告・連絡・相談を適正に行うことの重要性を学んだ。 ・倫理観をもって看護に臨む必要がある。 ・記録を書くということは重要なことである。 ・責任ある行動には、情報を共有することも必要である。 ・他職種との連携が大切である。 ・広い視野と臨機応変に対応できるようにしていくことが必要である。 ・自分中心の援助から患者中心の援助ができていった。
	2) 看護の質の向上へ向けた看護管理 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・管理実習では、人・物・お金・情報の管理が行われている。 ・看護管理者の実際から質のよい援助へつながっていると実感した。 ・医療事故の分析を行い、評価を行っていくことが安全対策につながっていく。
	3) 学習への振り返りと課題 (25)	<ul style="list-style-type: none"> ・分かっているつもりで、学びが不足だった。 ・知識、技術、アセスメント力が必要である。 ・自分の強み、弱みを評価していく。 ・最新の医療を学び向上心をもつことが必要である。 ・国試につなげていきたいと思う。 ・看護師の優先順位を観察していると、自分も考えられるようになった。 ・自己の看護の方向性を明確にし、努力を重ねていきたい。 ・フリー計画によって、良い看護をしていく上で、働いた時のイメージができた。 ・観察しているつもりでも、そうではないことに気が付いた。 ・よいケアを行うために自己管理は必要である。 ・どのような場面においても連携や共有することの重要性が分かった。 ・統合実習では、統合実習の意味を考えることができた。 ・コミュニケーションは信頼関係の構築に大事である。 ・研修会で新しい知識を身につけていきたい。 ・看護管理実習を通して視野が広がった。

ニユアルの活用と安全確認><医療事故後のフォロー>であった。④ 透析看護でのカテゴリーは3つの視点で、<患者の自己管理指導><血液感染予防、環境の整備><機器の取り扱いやシャント穿刺の技術>であった。⑤ 緩和ケアでのカテゴリーは1つの視点で、<看護チーム、他職種との連携>であった。⑥ リハビリテーションでのカテゴリーは2つの視点で、<退院後の継続と心理面のサポート><合同カンファレンスによる情報交換>であった。⑦ 内視鏡検査でのカテゴリーは2つの視点で、<患者の不安を軽減とスムーズな検査の進行><検査中の患者の観

察>であった。⑧ 皮膚・排泄ケアでのカテゴリーは2つの視点で、<認定看護師と褥瘡対策チームの活動><認定看護師の専門的な知識と指導>であった。⑨ がん化学療法看護でのカテゴリーは3つの視点で、<副作用の自己管理指導と患者・家族のサポート><薬剤の被曝予防への対処><他職種との連携と院内研修>であった。⑩ 医療連携でのカテゴリーは1つの視点で、<医療費・医療相談、退院後の支援>であった。⑪ 感染管理でのカテゴリーは2つの視点で、<院内の取り組み><来訪者の感染予防対策>であった。

実習目標5(表3)は、「看護実践を通して、自己の到達度について総合的な評価ができる」であり、総合的な評価と学びに焦点を当てている。学びは52項目を抽出できカテゴ

リーは3つの視点で、＜看護の質の向上へ向けた看護管理＞＜チームの一員として、責任ある行動の必要性＞＜学習への振り返りと課題＞であった。

V. 考 察

看護学実習においてその教授活動は、実習目標の達成を目指す学生の学習活動を支援するものである(杉村, 舟島, 2012)。今年度の統合看護実習の実習形式は、複数患者受持ちに関しては看護師のシャドー観察と一部援助の介入を、フリー計画では病院との話し合いの結果実習できる内容から選択した。いずれも、実習目標達成に向けて学生は行動し、教員は学習支援を実施した。以下に実習目標からの考察を述べる。

実習目標1は、「複数患者受持ち実習」と看護管理の理解に焦点を当てている。学びのカテゴリーは、時間管理では3つの視点があげられている。まず時間管理は、業務の優先順位についての構成をどのように組み立てていくのかを考えられている。学生は、優先順位に影響を与える要因があり、これまで一人の受持ち患者中心では見えなかった優先順位により時間管理が行われていることも実感している。また、援助には、看護師が患者への負担軽減と業務の効率性も考えて行動していることが理解できている。深石(2012)は、実習学生を受け入れて実習を行う中で、学生は「ケアを組み合わせることで患者の負担が軽減し、業務の効率性も上がる。時間を活用するための工夫が自己の課題であるという学びにつながっていた」と述べている。こ

のことからも、統合看護実習でのシャドー観察から、1人の受持ちでは見えなかった時間管理と効率性について学んでいると考えることができる。さらに、時間管理は1人の看護師では遂行できないことを、サブカテゴリーの「チームで協力し時間管理を行うこともある」と、いうことから、優先順位を構築していく能力も必要であることおよび、チームとの協働、他職種との連携・協働で成り立っていることも理解できている。

次に安全管理では、医療従事者の情報交換から様々な場面での安全確認の必要性、そのためには知識がないと予測した行動ができないこと、さらに患者自身も安全管理について行動できることなどを理解している。そして、自己の責任だけでなくチームで実施していくということも理解できている。さらにチームカンファレンスは重要な場であり、患者への看護や時間管理、応援体制などからチーム内での情報の共有の重要性について理解できている。これまでの実習では、1人の患者と自分が中心であるために連続した時間の中で看護が行われていることを考えることが少なかったと思われる。特に安全管理は時間管理と同時に行われていることを認識しており、ケアとその優先順位・時間管理は、ほぼ同一の管理のもとに実施されていることが学びと

して述べられている。

実習目標2では、「看護チームの一員」としての行動に焦点を当てている。カテゴリーは3つの視点である。この目標には、業務を遂行する上での責任を伴うことを理解できることが含まれる。看護チームの一員として行動を行うには、時間管理もまた重要な要素になっていることに気づいている。チームの中で協働していくことは、当然考えられることであるが、業務そのものに全て責任が伴うことであることを実感している。漆坂ら(2009)は、医療チームの役割について、学生が他職種との連携・協働の必要性や看護師の役割を学んでおり、「看護師としての姿勢・態度では、学生に看護師の責任の意識が芽生えていた」と述べている。さらに、これは学生が、自分自身を振り返ることで気づいたことである。本実習目標においては、複数患者を受持ち看護師と一緒に援助過程において、チームの一員であることへの自覚や責任について自覚してきている。看護技術については、シャドー観察と一部援助の介入によることによって看護技術自体の向上は望めない実習形態であった。そのために厚生労働省が定めている臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準（厚生労働省、2003）、および看護基礎教育の充実に関する検討会報告書にそった、「水準レベル1」においては振り返りで考えられていることが多かった。したがって、「水準レベル1」の自立レベルであっても、シャドー観察実習では限界があった。

実習目標3では、「看護管理者実習」であり、カテゴリーは2つの視点があった。師長と主任業務の見学から、管理者は病棟目標に向けて日々の看護実践に質の良い看護を提供でき

るよう、〈人〉〈物〉〈時間〉〈金〉〈安全性〉〈効率性〉について管理していることを理解した。また、病棟の管理者の看護観が看護や看護チーム・他職種に影響を与えていることを学んでいる。看護管理者は、スタッフや他職種への配慮や病院全体を考えたマネジメントの役割および、スタッフの教育的関わりを中心的存在として、ケアの質向上を目指す役割があるなど重要性を学んでいる。

実習目標4は、フリー計画の実施であり、カテゴリーは11項目の内容によって視点が異なる。実施できた内容は、表2に示すとおりである。フリー計画は、学生にとって主体的な行動を求められるために、自ら実施内容を希望できる学生は少なかった。事前学習もこれまでとは違い、自主的に学ぶことが必要になり、依存的に行動している学生はやや消極的であった。主体的な行動ができるためには、自己教育力が育成されていることが必要である。本学の自己教育力の縦断研究（下川原、2012）では梶田（1994）による自己教育力の構成要素である第IVの側面「自信・プライド・安定性」が、3学年とも一様に低かった。この第IVの要素である側面は第Iの要素「成長・発展への志向」、第IIの要素「自己の対象化と統制」、第IIIの側面「学習の技能と基盤」の全ての精神的基盤となるものである。そのためには、精神的な支援、効果的な教授活動のための組織的な関わりなどが必要であることが示唆されていた。そこで、実習前の学生の声を聴き不安を解決していくように努めた。しかし、実習前は、他の専門看護実習中であり、統合看護実習で何を計画するのか考えられないという声が多かった。そのために、フリー計画の項目と実施基準に

沿って計画をしていたことが目立ち、科の特徴から計画を考えられていた学生は少なかった。そのような、事前の傾向をもった学生ではあったが、実習中に各部署の担当者から専門分野化した領域の説明を受けることで、チーム医療の中の協働を理解し今後の自分をイメージしている学生も多くいた。フリー計画実施を全体的にみると、視野が広がり看護へのモチベーションが高まり、面白さを感じていた。認定看護師の役割や見学した科の特徴から、後追いではあるがチーム医療の役割や患者への医療の在り方を学び充実した実習だったと感じられている。

実習目標5は、総合的な評価と学びに焦点を当てている。カテゴリーは3つの視点がある。今年度の実習は、看護過程の展開はなかったが、患者（家族）・医療従事者・看護チームについて考える振り返りの時間を確保できる学生が多かった。チームの一員として責任ある行動の必要性については、「チームの一員として責任ある行動、積極的に学ぶ姿勢が必要である。自分中心の援助から患者中心の援助ができていった」というサブカテゴリーからもあるように、気づきと行動が徐々にできている。看護師に必要な看護実践能力、管理能力、人間関係調整能力（ヒューマンスキル）の3つの能力について評価・反省することによって、看護の責任を自覚し自己の課題やどのような看護をしたいかについて明確になった学生が多いと思われる。フリー計画では、看護師の行動を観察することで看護への視野が広がり面白さを感じており、それがモチベーションをあげていた学生も多くいる。実習はストレスフルな出来事として学生に感じられているが、学ぶことが面白いという学

生の気持ちを大事にしていくことが、指導側にとっても必要であると気づかされた。厚生労働省の看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（2014）によると、「看護師教育においては、限られた時間の中で学ぶ知識が多くなり、カリキュラムが過密になっている。そのため学生は主体的に思考して学ぶ余裕がなく、知識の習得はできたとしても、知識の活用をする方法を習得できないことがある」と提示している。そのためには、実習中に学生が考える時間を確保することも必要になってくると思われる。

以上は実習目標からの考察であるが、実習目標1～4まではサブカテゴリーからみると、記録上は、「できなかった」という記述はなく、どういうことを学んだか、体験したか、気付いたかという視点で書かれている。実習に入る前は、実習のイメージができないという学生の声が多く聞かれたが、実習中はむしろ「楽しい」、「視野が広がった」、「統合実習をしてみてもよかった」という声が多かった。情報収集は量的・時間的に限界があるのではないかと感じていたが、各病棟からの配慮があり情報収集は概ねできたことを実感していた。学生自身もチームの一員として実習できたことが何より新鮮であったようである。ただし、「できた」という振り返りも「不足だった」こともどうすればよかったのかを述べるように指導していく必要があると考える。

また、「主体的に」と「知識の不足」については、実習中における学生の気づきが効果的に生かされ補われていくことが可能であると考えることができる。そのために、今後は形成的評価の視点から検討していくことも必要

であることが示唆された。

VI. 結 論

学生の実習目標達成状況は、概ね実習内容を理解しており目標は達成できたと考えられる。以下のことについて学びがあった。

1. 複数患者の看護からの学び

- ① 優先順位に影響を与える要因があり、優先順位により時間管理が行われている。
- ② 援助には、看護師が患者への負担軽減と業務の効率性も考えて行動する。
- ③ チームの協働、他職種との連携・協働で成り立っている。
- ④ 安全管理は時間管理と同時に行われる。

2. チームの一員としての行動から（フリー計画も含めて）の学び

- ① 時間管理が重要な要素になる。
- ② 業務そのもの全てに責任を伴うものである。
- ③ 他職種の専門分野化した領域のことを知ることでチーム医療の協働を理解し、今後の

自分をイメージできることが多い。

3. 病棟管理の視点からの学び

- ① 病棟目標に向けて日々の看護実践に質の良い看護を提供できるよう、「人・物・時間・金・安全性・効率性」について管理している。
- ② 管理者の看護観が看護や看護チーム・他職種に影響を与えている。
- ③ 看護管理者は、マネジメントの役割、スタッフの教育的関わりの中心的な存在として、ケアの質向上を目指す役割がある。

4. 総合的な振り返りから

- ① 看護の質の向上へ向けた看護管理、チームの一員として責任ある行動の必要性を理解した。
- ② 学習への振り返りと課題を明確にできた。

謝 辞

本研究においてご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

引 用 文 献

- 厚生労働省（2003）. 臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準. 厚生労働省ホームページ, www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4a.html.

- 厚生労働省 (2009). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. 厚生労働省ホームページ, www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1268643_5_5_1.pdf.
- 厚生労働省 (2013). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 厚生労働省ホームページ.
- 梶田叡一 (1994). 自己教育への教育. 東京: 明治図書, 36-52.
- 深石タカ子 (2012). 統合実習指導をとおして示唆された看護学生の課題—チームの一員としての自覚と状況判断能力—. 看護展望, Vol.37, no.5, 36-52.
- 下川原久子 (2012). 本短期大学看護学科学生の自己教育力の現状 (第3報). 産業文化研究, 22号, 37-54.
- 杉村みど里, 舟島なをみ (2012). 看護教育学 第5版. 東京: 医学書院, 258-261, 283-291.
- 漆坂真弓, 木村紀美他 (2009). 成人 (基礎) 看護領域における看護総合臨床実習の学びと課題—レポートの分析を通して—. 弘前学院大学紀要, 第4巻, 25-35.